

郡山の書店に行った。文庫本コーナーに行ってみた。「新潮文庫の100冊」が並んでいた。ある本を探した。夏目漱石の「こころ」である。最初は見つけられなかった。「あれっ、100冊から外れたか」と思った。そうしたら、表紙が白一色で、何のイラストやデザインもない本があった。タイトルも小さめの文字で「こころ」と書かれてあった。これが、かえって、この本を際立たせていた。

手に取ってみた。何か特別な本のように思えた。裏表紙を見た。本体370円とあった。安い。40数年前に読んだ頃と比べて、さほど上がっていないのではないかな。多少驚いた。いまや、ラーメンを食べるのに1000円が必要な時代である。文庫本の値段はすごい。

大事にレジに持って行った。「カバーをおつけしますか」「お願いします」と丁寧に答えた。家を探せば、昔の文庫本「こころ」は出てくるだろう。引っ越しの度に、文庫本「こころ」は荷物の選別作業を勝ち残ってきている。処分できない存在なのである。それでも、新しいものを購入した。新たな気持ちで、「こころ」と向き合うためである。

読み始めようとして、やめた。どうせならと、ある実験をすることにした。電子書籍と比べてみることにした。まずは、スマホで読み始めた。何の問題もなく読める。これならば、通勤電車の中で読むにはいいのではと感じた。近い将来、車の自動運転が実現すれば、車の中でも読めるかもしれない。そんなことを考えた。スマホで30ページほど読んだ。

次に、文庫本で読んだ。もちろん、内容に変わりはない。文庫本特有の本の匂いがするかと思ったが、それはなかった。あのページをめくるよさを感じることができた。次のページには、どんなことが書かれてあって、どんな展開が待ち受けているのだろうというワクワク感である。早く読んでページをめくりたいという欲求である。スマホでは、こうはいかない。何だか味気ない。次のページに向かう気持ちが薄まる。

昔、まだ若かった頃、生徒に「小説は、おもしろくないと思っても50ページは我慢して読んだほうがいい。すると、急におもしろくなってくることがある」などと話していたことがあった。今回もそうだった。いくら読んでも、さっぱりおもしろくはない。だが、私の場合は、この後の展開を知っているため、読み進めることができた。

今の高校生は、どうなのだろう。「こころ」を読むことができるのだろうか。鎌倉の海岸で出会った先生という主人公の不思議な魅力にとりつかれた学生の眼から、間接的に主人公が描かれる前半は、さほどおもしろいとは思えないのではなかろうか。しかし、この前半を読まないで、後半の主人公の告白体との対照のよさはわからない。後半は、一気に読者を作品に没入させる。これが、夏目漱石である。明治の知識人である。日本を代表する国民的作家である。

きっと、40数年前の私は、今とは違った心持ちだったのだろう。日本の文豪の作品を次々に読んでいたときである。夏目漱石の「こころ」も読まなければならないものだったに違いない。長い時を経て、再び「こころ」と相対した結果、昔の自分に会えたような気がした。